国立国語研究所学術情報リポジトリ

『日本言語地図』にみる牛の鳴き声のオノマトペ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹田, 晃子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002691

『日本言語地図』にみる牛の鳴き声のオノマトペ

竹田　晃子
（国立国語研究所）

１．はじめに

「大規模方言データの多角的研究プロジェクト」では，『日本言語地図』の元カードに基づくデータと，略図作成が可能なデータを整備しつつある。本稿では，そのデータを用いて，『日本言語地図』で公開されている方言地図のみでは分析の難しかった調査項目を取り上げ，新たに略図を作成しながら分析を試みるものである。

項目として，牛の鳴き声のオノマトペを取り上げる。『日本言語地図』には，「牛の鳴き声」「ふくろうの鳴き声」「雀の鳴き声」の 3 種類が収載されている。このうち「牛の鳴き声」の図では，牛と子牛の両方の鳴き声が，記号を変えて図示されている。そこで，本稿は，この 2 種類の回答を分けて方言地図を作成し，一般名称としての「牛」「子牛」と比較しながら，動物の名称とその鳴き声のオノマトペの関連を考察する。

２．動物の名称と鳴き声のオノマトペの関係

『日本言語地図』の調査結果をめぐって，牛の鳴き声のベー類と牛・子牛を意味するベコの類の関連を指摘する記述には次のものがある。

国立国語研究所(1972)「5-206　うし（牛）」『日本言語地図　第 5 巻　解説』(pp.18-21)
同　上　　「5-206　こうし（子牛）」同上（pp.25-30）
同　上　　「5-210　もうもう（牛の鳴き声）」同上（pp.30-33）
澤木幹栄(1979)「物とことば」徳川宗賢(1979)『日本の方言地図』中央公論社（pp.93-97）
佐藤亮一編(2002)「うし（牛）」『方言の地図帳―お国ことばを知る』小学館（pp.248-249）
同　上　　「こうし（子牛）」同上（pp.254-255）

これらの記述には，共通して，牛の鳴き声と牛・子牛の名称との関係と，擬声語の分布の分析について指摘する内容が含まれている。以下では，図 1・図 2 に佐藤(2002)の略図，図 3 に澤木(1979)の略図を示しながら，上記の内容を紹介し，論点をまとめておく。

２．１　牛の鳴き声と牛・子牛の名称の歴史的関係

歴史的関係について，特に国語研究所(1972)「5-206　うし（牛）」には，次の 3 つの考え方が示されている。

・中央語で子牛を表すベコが，東北に伝播するときに牛の意味になった。東北では子牛を表すのに，これにベコッコと指小辞を付けて区別するようになった。
・中央語で牛を表すベコのコが子と理解されるようになり，子牛を表すようになった。東北や石川のベコは古い中央語の残存と解釈される。
・全国的にベーが牛や子牛を表しており，それにコを付けたベコが各地で生まれた。したがって伝播と考えない。

上記 3 つの考え方は他の文献でも指摘されているが，結論は見いだされていない。

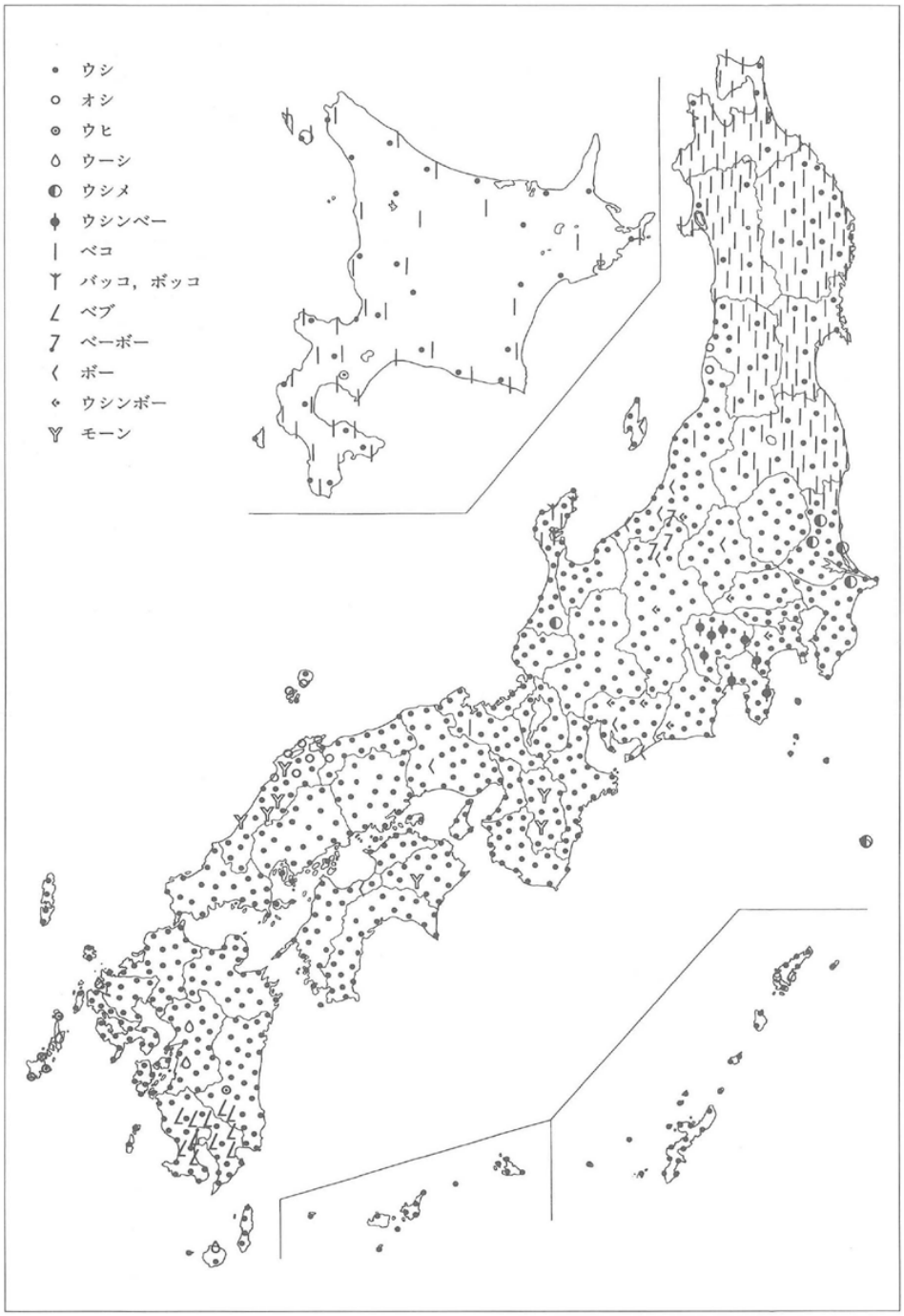

図1　うし（牛）

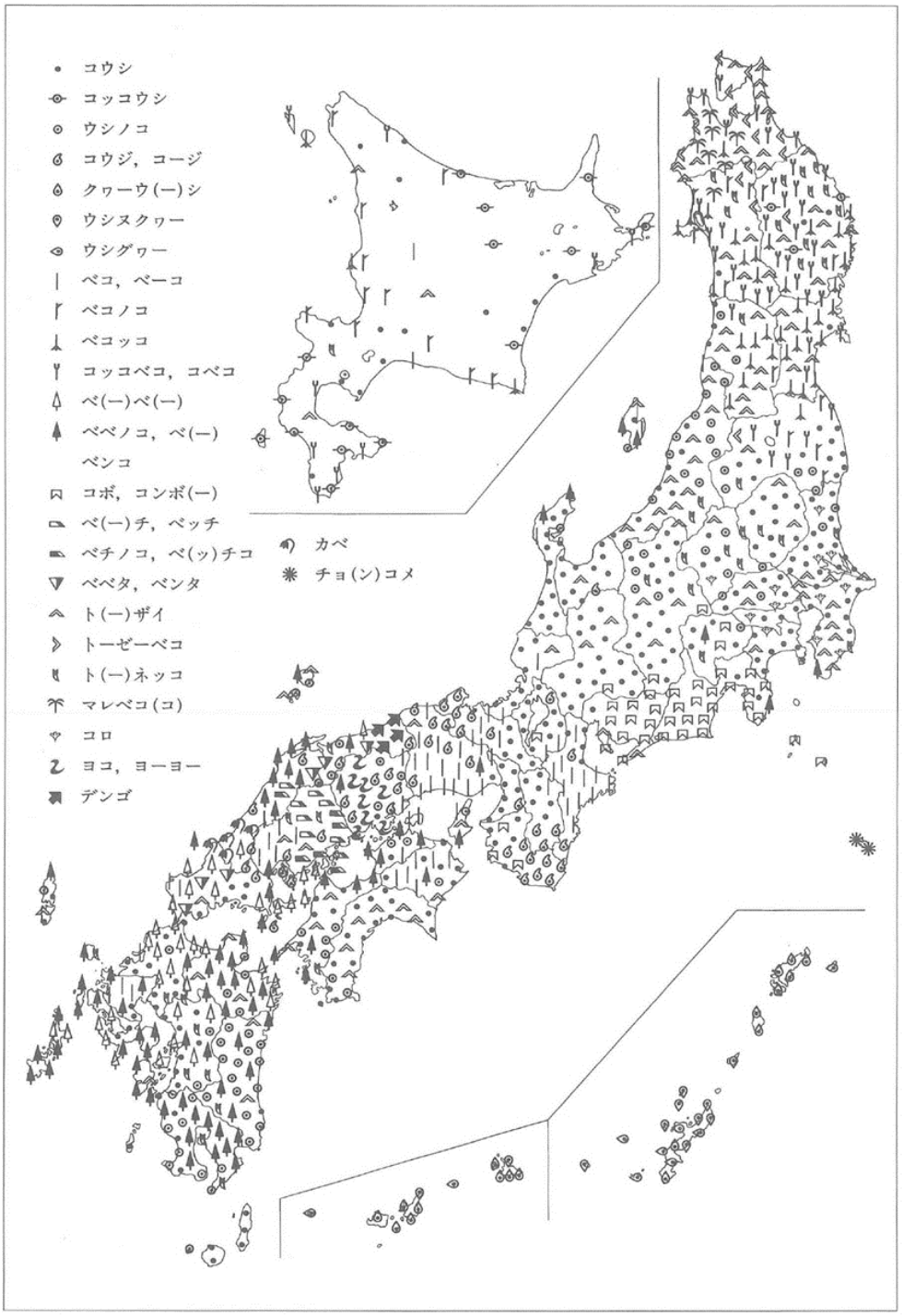
コウシ
コッコウシ
ウシノコ
コウジ，コージ
クゥーウ(ー)シ
ウシヌクゥー
ウシグゥー
ベコ，ベーコ
ベコノコ
ベコッコ
コッコベコ，コベコ
ベ(ー)ベ(ー)
ベベノコ，ベ(ー)ベンコ
コボ，コンボ(ー)
ベ(ー)チ，ベッチ
ベチノコ，ベ(ッ)チコ
ベベタ，ベンタ
ト(ー)ザイ
トーゼーベコ
ト(ー)ネッコ
マレベコ(コ)
コロ
ヨコ，ヨーヨー
デンゴ
カベ
チョ(ン)コメ

図2　こうし（子牛）

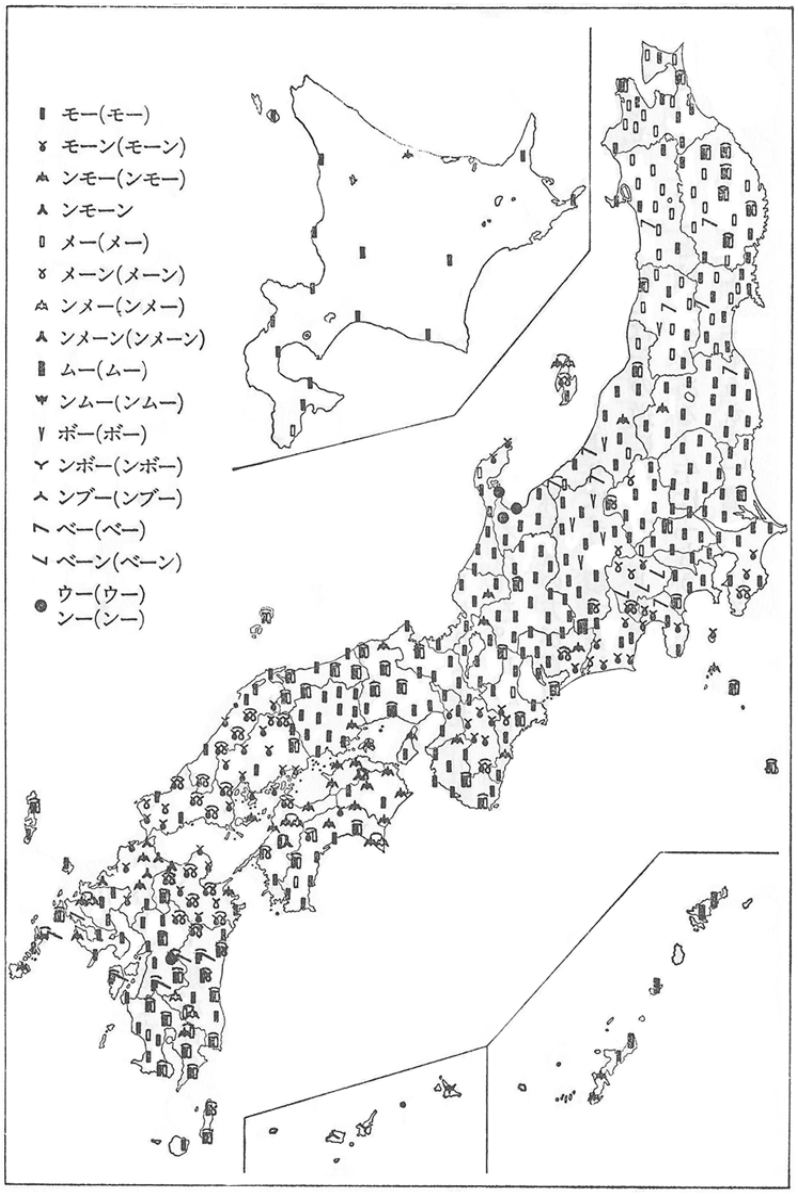

図 3　もうもう（牛の鳴き声）

さらに，国語研究所(1972)「5-206　うし（牛）」では，牛の鳴き声と牛・子牛の名称に関連があることは認められるものの，擬声語そのものを名称として用いることが好まれなかったため，幼児語などとして用いられ，一般的な語としては使われなかった可能性が指摘されている。その上で，擬声語に接辞コなどがついた形が安定した形として，名称として用いられたとみている。後述するが，この指摘は，オノマトペが名称（名詞）として一般化する一つの可能性を示したものと考えられる。

２．２　擬声語の分布が伝播かどうか

擬声語の分布が伝播によるものかどうかについて，国立国語研究所(1972)「5-210　もうもう（牛の鳴き声）」では，他の言語項目と比べると，各地で独自に生まれた語形である可能性が高いことが指摘されている。

また，本図は擬声語の分布図であるという点に特色があり，この場合に，言語地理学的解釈の一般原則が適用できるか否かも問題になろう。意味と形式との結合が恣意的であり，それにもかかわらず一定の地理的分布が認められるところに“解釈”の根拠があるとすれば，擬声語にあっては，その対象の固有の音（声）をいわば模倣するわけであり，形式選択の恣意性について，かなりの程度に制約を受けるであろうと思われる。したがって，同一形式が相互に離れて分布している場合に，両者がそれぞれの地域で独自に生まれた可能性が他に比例して圧倒的に強いことに注意しなければならない。（pp.32-33）

澤木幹栄(1979)にも次のようにある。

（前略）同じものを表す擬声語同士、言語や方言が違ってもどこか似てくるのは擬声語の「模倣」という性質上、当然であろう。「わんわん」と bowwow にしても、響きの似ているところがないわけではない。この「もうもう」の分布図を見ても、牛の鳴き声を表す語形はどれも同じようなものである。語形の種類はもとの『日本言語地図』ではかなりあるのだが、イ段・ア段の母音はあまり使われないし、語頭に出てくるのはバ行かマ行の子音か、そうでなければ「ン」と大体決っていて，変異の幅があまり大きくない。それに、これは擬声語としての形式上の制約から来ると思われるのだが、語形の長さがほぼ一定していて、語末は長い母音か、「ン」しか立たない。このような場合、飛びはなれた地点に同じ語形があっても、それが古い語形の残存かどうかは、なお検討を要する。同一の語形が独立に生まれる可能性が、ほかの場合に比べてずっと大きいからである。（ここまで p.94）（中略）擬声語の場合の言語地理学的解釈にひそむ問題については、前に述べたとおりだが、この地図では、当否はともあれ解釈が可能だけのはっきりした分布があるという事実が大切だと思われる。（p.97）

同様に，佐藤亮一編(2002)にも「鳴き声のような擬声語については、べーのような表現が伝播ではなく、各地で自然発生的に生まれた場合もありえよう。」（p.248）とある。

確かに，実際の声や音を模して発生するものである以上，擬声語・擬音語は，お互いの関係がない地点において同時多発的に発生する可能性があることは否めない。また，その可能性が名詞や動詞など他の語に比べて高いこともしかりである。しかし，擬声語・擬音語であっても，いったん語形として成立してしまえば，それが伝播して一定の分布を形成するということはあり得るだろう。

本稿で扱うのは牛の鳴き声であるため，同時多発的に発生した擬声語である可能性は否定できない。しかし，オノマトペの中でも，擬態語は動きや状態を表すものであり，同時多発的に各地で同じ語形が発生するとは考えにくいため，分布形成について論じる場合には，擬声語・擬音語よりも適切であると思われる。残念ながら『日本言語地図』には擬態語の調査項目は含まれていないため，調査を含め，今後の課題となる。

３．『日本言語地図』の資料

３．１　牛に関連する地図

『日本言語地図』には，「牛の鳴き声」「ふくろうの鳴き声」「雀の鳴き声」の 3 種類が収載されている。牛にかかわるデータには，第 5 集に次のものがある。

210 図　もうもう（牛の鳴き声）
206 図　うし（牛）
207 図　おうし（牡牛）
208 図　めうし（牝牛）
209 図　こうし（子牛）

このうち 210 図は，牛と子牛で記号を変えて地図化されているが，元となったカードにおいてもこれが区別されている。そこで，牛と子牛とでデータを分けながら，地図化を行う。なお，本稿では「おうし（牡牛）」「めうし（牝牛）」は対象から除外する。

３．２　「もうもう（牛の鳴き声）」の語形

最初に，この項目の調査方法を確認しておく。「もうもう（牛の鳴き声）」の質問文は，『日本言語地図』第 5 巻の図 210 によると，「牛の鳴き声を言い表すのに何と言いますか。子牛の鳴き声を何と言いますか。(質問番号 222)」とあり，じっさいの調査票『日本言語地図作成のための調査票―第 2 調査票―』では，これに「コウシに特別の鳴き声があれば，注記してそれも記入する。」という注意書きがある（p.26）

得られたデータについて，『日本言語地図解説―各図の説明 5―』の「210. もうもう（牛の鳴き声）」の冒頭には次のようにある（p.30）。

> 牛の鳴き声一般，および子牛の鳴き声について質問し，子牛の鳴き声に特別の言い表し方が認められれば，それを注記するという形で報告を求めたものである。したがって，この項目は「牛の鳴き声一般」（以下，「牛の鳴き声」と略称する）と「子牛の鳴き声」との 2 枚の図に分けることも可能であるが，子牛の鳴き声に特称が認められない地点がかなり多かったので，両者を 1 枚の地図にまとめて登載し，子牛の鳴き声に特称が認められる地点のみそれを「子牛の鳴き声」（凡例 B）として地図上に表示することにした。したがって，牛の鳴き声と子牛の鳴き声とが同一形式の地点や，牛の鳴き声のみをカードに記載し，「子牛のは別にない」「子牛は NR」などと注記のある地点の語形は，それを「牛の鳴き声」（凡例 A）として地図上に登載してある。1 地点に 2 つ以上の語形が併記してあって，しかも，牛の鳴き声，子牛の鳴き声に関する注記のない場合も，「牛の鳴き声」（凡例 A）どうしの併用として地図上に登載した。なお，本図では数地点で MOO　MOO・MOON などの語形について「共」「新」「希」の注記があった程度なので，＜併用処理の原則＞は適用しなかった。また，「未調査」の地点については 202 図の解説に一括して触れてあるので参照されたい。（以下略）

上記のことから，牛の鳴き声の回答地点に比べて，子牛の鳴き声を回答していない地点が多いことに注意が必要である。カードデータを確認したところ，子牛の鳴き声はのべ 398

語，牛の鳴き声はのべ 2346 語が回答されており，約 6 倍もの差がある。なお，他に NR が 34，未調査が 132 地点あるが，これらを除外して本稿の分析を進める。

この項目に回答された語形のバリエーションについて，多い順に左から並べつつ，牛と子牛の語形数を区別すると，図 4 のようになる。

牛にはモーオ・モーなどのモー類が多いが，子牛にはメー・メーメー・メーンなどのメー類が多い。繰り返し語形かどうか，最後にンがつくかどうかなど，オノマトペ語形としての特徴について，牛と子牛の間に目立った違いはみられない。

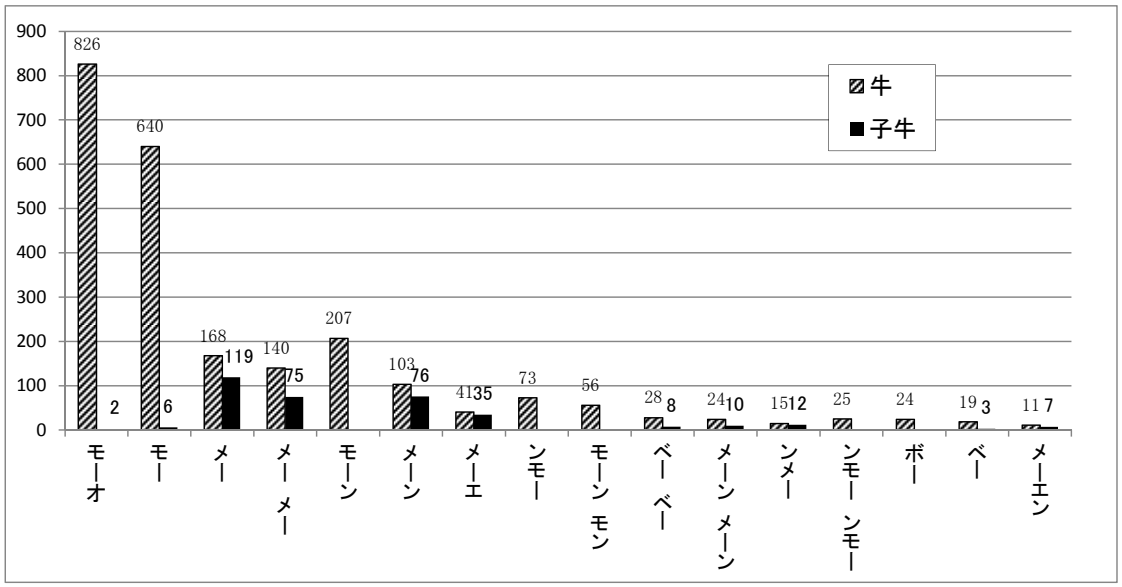

図 4　LAJ5-210 図「もうもう（牛の鳴き声）」

（回答地点の多かった語形 16 位までの内訳）

３．３　牛・子牛の鳴き声

子牛の鳴き声を除外し，共通語と同系のモー類を除外した上で地図化し，図 5 に示した。繰り返し語形は 1 回に単呼化して示した。これによると，メー類は，主に東北地方（福島を除く）にまとまった分布があり，西日本に点在している。ベー類は，山梨・新潟と，東北中央部・九州西部に点在している。中部地方にはボー類があり，その分布の北端の新潟，南端の山梨に，ベー類が比較的まとまって認められる。琉球地方では，北部にムー類，南部にムー類とボー類がみられる。

子牛の鳴き声の回答を抽出し，共通語と同系のモー類を除外した上で地図化し，図 6 に示した。これによると，メー類は西日本に分布しており，東日本には点在している。ほかに，ベー類が九州に点在する。

牛の鳴き声に対して子牛の鳴き声の回答数は著しく少ないと前述した。このことをふまえて図 5 と図 6 を比べると，子牛の鳴き声ののべ回答数が牛の 6 分の 1 と少ないのに対して，図 6 の西日本に地点が多いが，これは牛の鳴き声に比べて子牛のほうには共通語形のモー類が少なかったことと，牛と子牛を区別して回答した地点が西日本に多かったためである。次に，メー類が，牛では東北，子牛では西日本，というようにまとまって分布しているが，この分布は，相補的である。また，ベー類を回答した地点は，中国地方に 2 地点と，九州中央部に点在するのみで，多くはない。

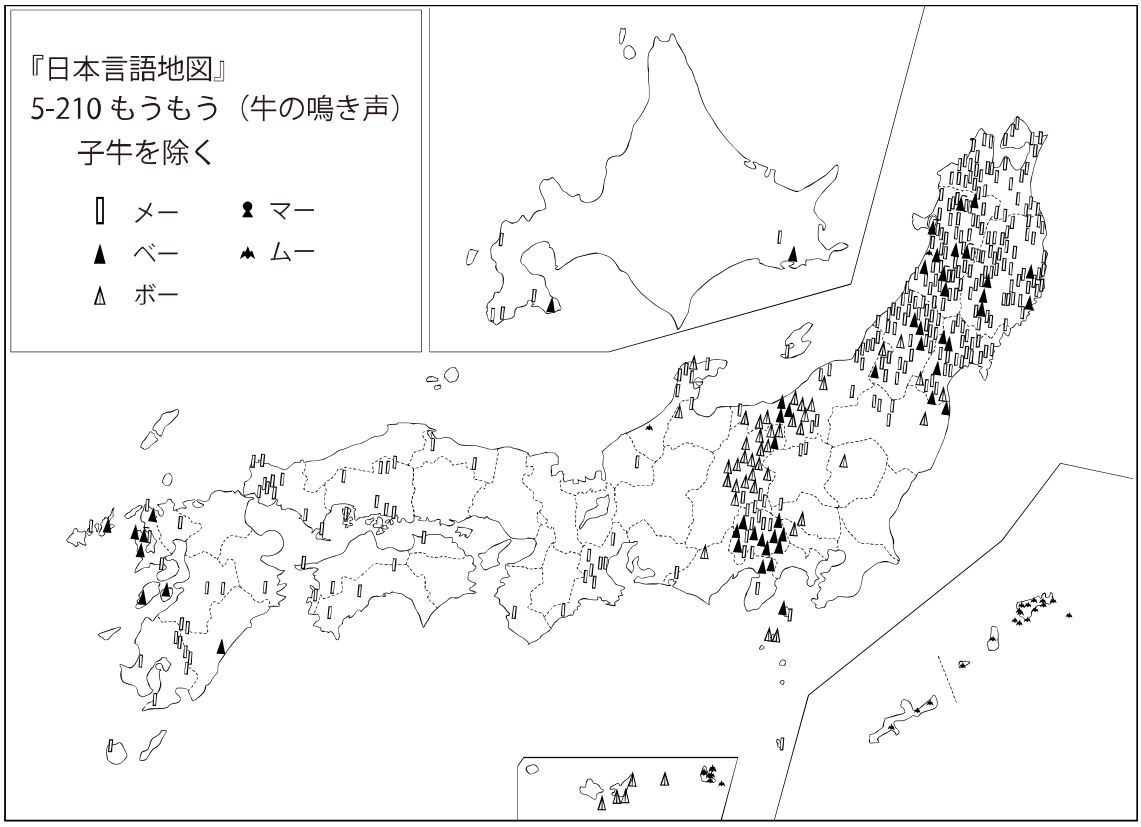

図 5　牛の鳴き声

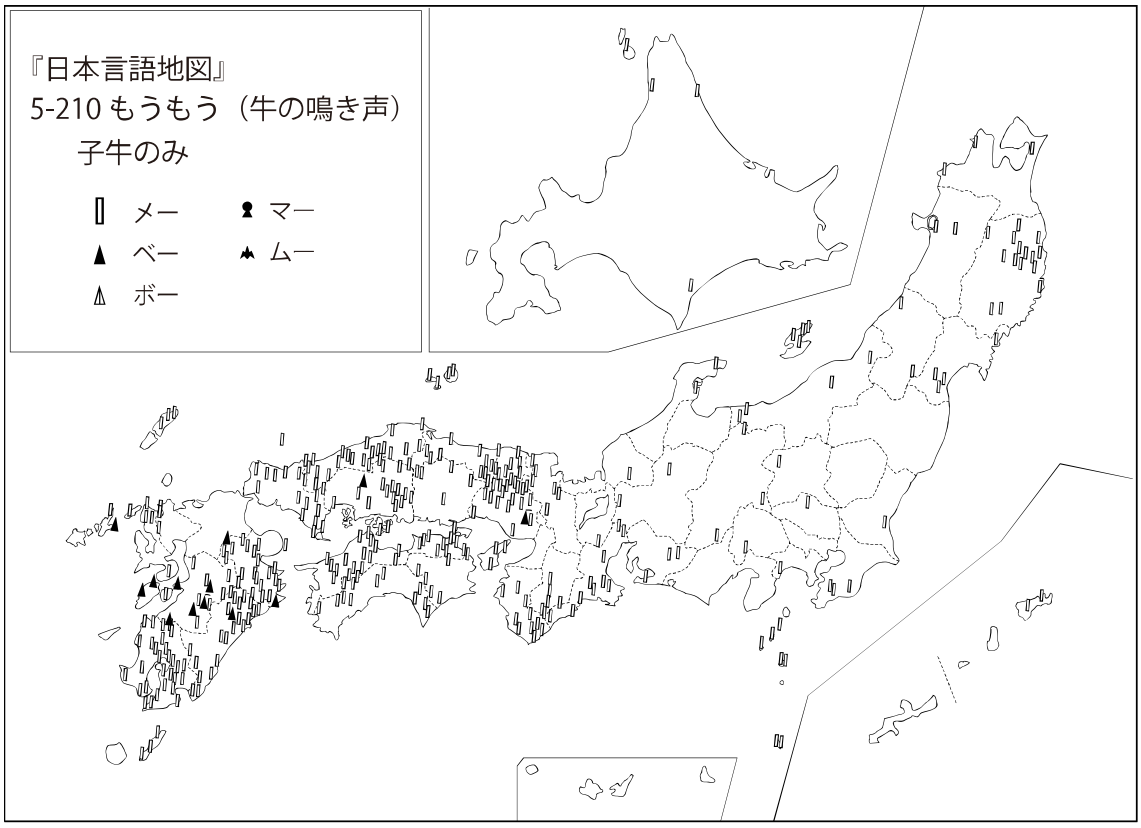

図 6　子牛の鳴き声

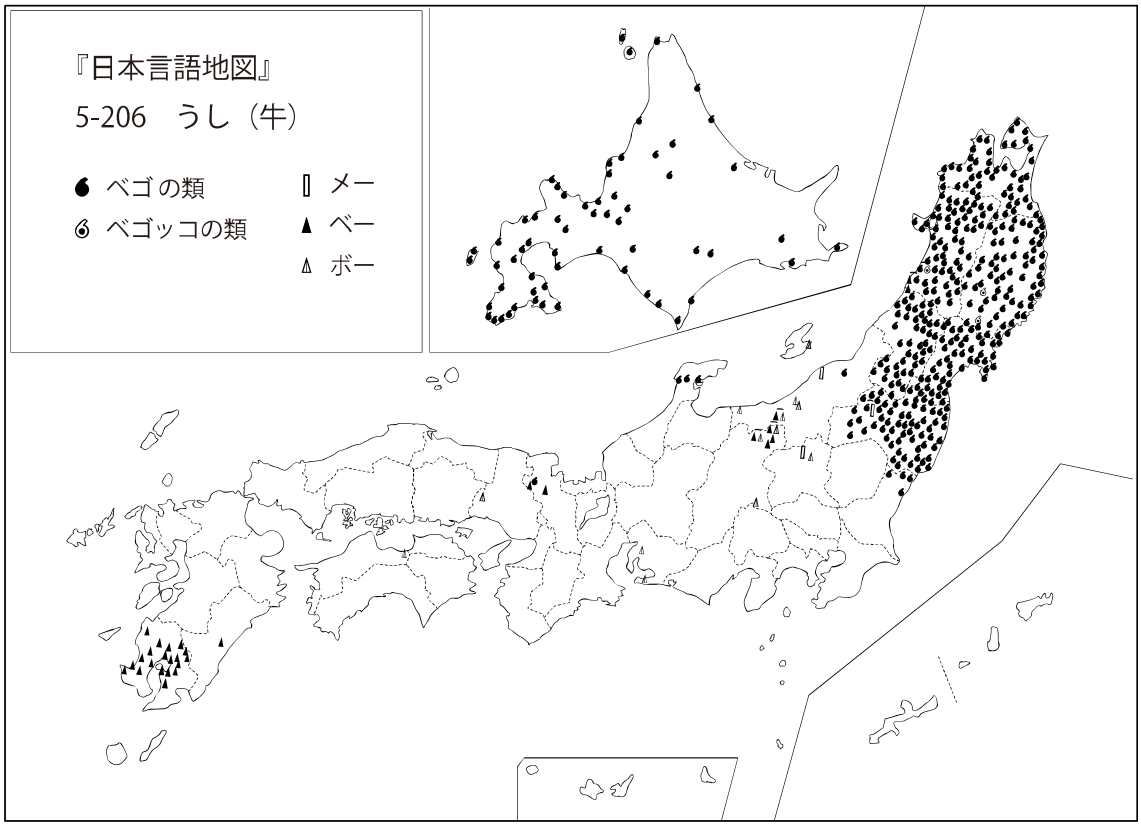

図７　牛（名称）

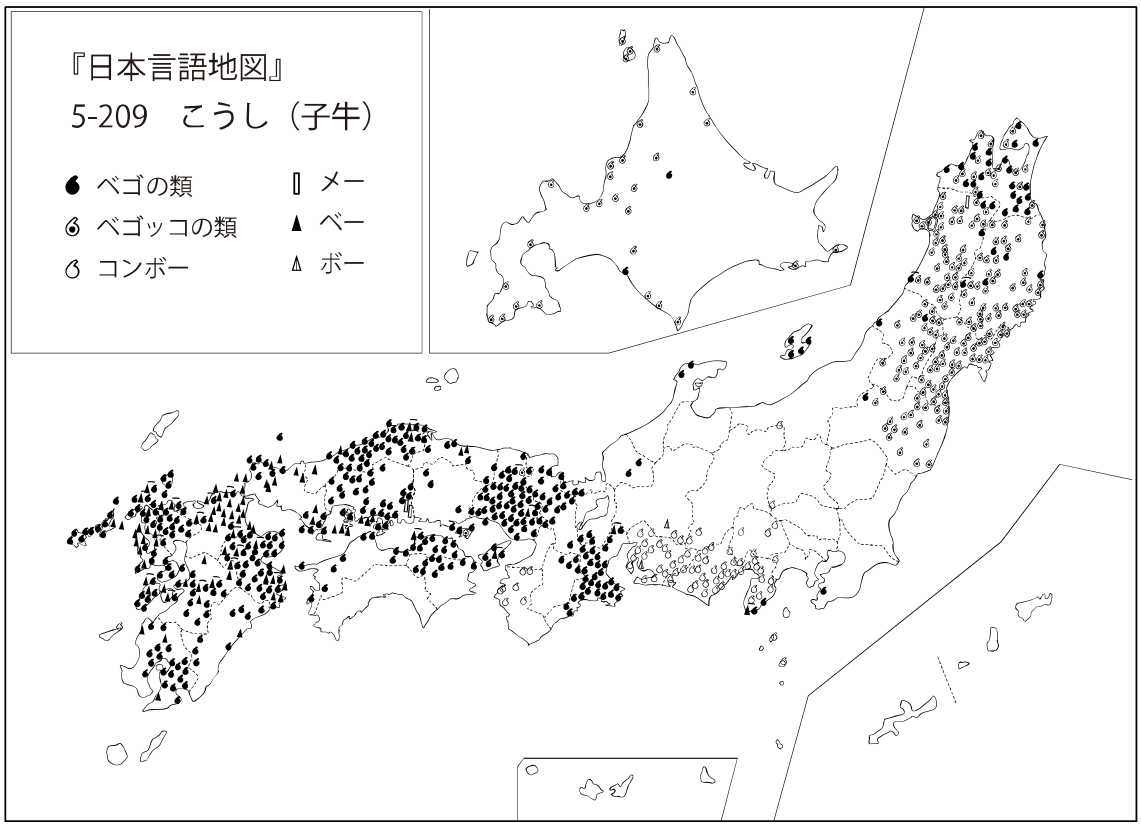

図８　子牛（名称）

３．４　牛・子牛の名称

牛・子牛の名称のデータから，鳴き声のオノマトペに関連があると思われるベ・メ・ボの類を抽出して地図化したのが，図 7（牛），図 8（子牛）である。共通語形と同系のウシ類・コウシ類を除外したほか，子牛の名称を尋ねる質問文に「今年生まれたばかりの牛」とあったことによるトーネンコ（当年子）などの回答も除外した。

図 7 の「牛」では，新潟県から長野県にかけての地域にベー・ボー，鹿児島県にベーと回答した地点が分布している。新潟県から長野県にかけての地域では，牛の鳴き声もベー・ボーと回答されていたことから，牛の名称と鳴き声が同じ語形であることがわかる。ベに指小辞コが付いたと思われる形をベコ類としたが，このベコの類は北海道・東北地方全域に色濃く分布している。

図 8 の「子牛」では，静岡県・愛知県・和歌山県などにコンボー/コボーの類が回答されている。ベコの類は，偏りつつも西日本に広く分布しており，東日本では青森県など東北北部に点在している。このベコに指小辞コが後接したとみられるベコッコの類が，北海道・東北地方に分布している。図 7 と比べると，北海道と東北地方（青森県の一部を除く）では，牛はベコ，子牛はベコッコと呼び分けることがわかる。関東・中部地方が抜けており，青森にベコ類／ベコッコが混在している点でやや強引ではあるが，これを ABA 分布ととらえることができそうである。少なくとも，東北地方にベコ類が分布した後にベコッコが生じたということはいえるだろう。また，山口県・福岡県・長崎県のあたりに，子牛をベー類で呼ぶ地点が比較的まとまって分布しているが，図 7 で「牛」をベー類で呼ぶ地点とは異なる。これも，ベコ類の分布域の中央部にベー類を回答した地点があるようにみえる。

図 7 と図 8 を比べると，多くの地点で牛と子牛の名称で語形が異なるのに対して，語形で区別しない地点は青森県にやや多い。ベコの類は，北海道・東北地方では牛，西日本では子牛に回答されており，相補分布的である。

３．５　鳴き声のオノマトペと動物の名称の関係

ここで，図 5「牛の鳴き声」と図 7「牛（名称）」，図 6「子牛の鳴き声」と図 8「子牛（名称）」について，それぞれの関係をみる。

図 5「牛の鳴き声」のベー類は，東北地方，新潟・山梨・静岡，長崎・熊本に点在しており，図 7「牛（名称）」のベコ類は，東北地方に分布している。図 6「子牛の鳴き声」のベー類は，西日本の兵庫・広島と九州中央部に点在している。他に，図 8「子牛（名称）」のベコ類は西日本に分布しており，青森に比較的まとまった分布域がある以外は，東日本に点在している。

これらの分布に対応関係をみると，鳴き声にベー類が回答されている地域では，動物の名称としてベコ類が回答されていると考えられる。実際の回答地点をカードデータによって照合すると，牛の鳴き声にベー類を回答した 48 地点中，牛をベコ類と回答した地点は 41 地点である。子牛の鳴き声にベー類を回答した 14 地点中，子牛をベコ類と回答した地点は 13 地点である。これは，鳴き声をベーとする動物の呼び名がベコ類である地点が多いということである。ただし，全国的に見ると少なく，この対応関係が古いものであるかどうか，また，擬声語と名称のどちらが先に成立したかについては，現時点では不明である。

３．６　まとめ

牛の鳴き声（図 5），子牛の鳴き声（図 6），牛の名称（図 7），子牛の名称（図 8）の分布の特徴をあげると次のようになる。

(1)牛の鳴き声を表す東北地方のメー類と，子牛の鳴き声を表す西日本のメー類は，相補的に分布している。

(2)牛の鳴き声を表す東北・中部地方のメー類と，子牛の鳴き声を表す西日本のメー類の分布域に，ベー類が点在している。

(3)牛を意味する北海道・東北地方のベコ類と，子牛を意味する西日本のベコ類は，相補的に分布している。

(4)北海道・東北地方では，子牛の名称にベコッコ類（ベコ＋指小辞コ）を回答しており，牛はベコ類，子牛はベコッコ類という対立が確認できる。

(5)北海道・東北地方では，子牛を表すベコッコの分布域にベコ類が点在している。特に，青森県では子牛を意味するベコ類が多い。西日本にはベコッコはほとんどない。

これらのことから，次のようなことが考えられる。

(1)(2)については，メー類の分布域で，メー類がベー類に交替しつつあるか，あるいはベー類が新たに生じつつあると考えることができる。

(3)から，ベコ類の成立について，西日本で成立した子牛を意味するベコ類が東北地方に伝わる際に牛を表すようになったか，あるいは鳴き声がベーである動物（あるいはその子ども）をベコ（ベ（オノマトペ）＋コ（指小辞））と呼んだか，両方の可能性がある。

(4)(5)で，ベコッコの分布域にベコ類が点在することから，牛・子牛の名称としてベコ類が成立してから，北海道・東北地方で子牛を意味するベコッコが成立したと考えられる。東北地方では，動物の子どもをコッコと呼ぶが，これはコ（子）に指小辞コが付いた語形と考えられる。ベコが牛の名称として成立した後，その子どもの名称として指小辞コを付けたベコッコが生じた可能性もあるが，ベコが子牛の名称として成立した後に，コを付けたベコッコを子牛の名称としたために，ベコが牛の名称となった可能性も否定できない。

最後に，鳴き声と名称の関係についてまとめる。３．５で述べたように，鳴き声にベーを回答した地点には牛・子牛をベコと回答した地点が多いが，国語研究所(1972)の記述では，擬声語そのものを名称として用いることが好まれず，幼児語などとして用いられ，一般的な語としては使われなかった可能性が指摘されており，擬声語に接辞コなどがついた形が名称として用いられたとある。このことは，オノマトペが動物の名称として用いられる際には，幼児語として用いられるか，何らかの変形が必要であるということである。

方言においては，オノマトペそのものが何らかの規則によって変化した語形がその鳴き声・状態の動物・人物を表す名詞として用いられることがある。鹿児島県喜界町の南西部では，オノマトペの繰り返し語形を短縮化し，その語形の末尾を長音にした語形が，名詞として使われている。たとえば，「猫」が喉を鳴らす音をあらわすオノマトペ「グルグル」に対応する形で，猫を意味する「グルー」が用いられており（中本正智(1981)(1987)），猫を呼び寄せるときに使う「グルグル，グルグル」を変化させた形「グルー」が，その動物の名称として用いられていると考えられる。他にも，アドゥナアドゥナ（のろのろ）とアドゥナー（のろま），ヨーガリヨーガリ（ひょろひょろ）とヨーガリー（痩せた人）などの対応関係が確認された（竹田晃子(2011)）。

他地域でも，音から生じた語形から呼び寄せ語ができ，呼び寄せ語に指小辞コを付けることで名詞化するという事例がある。宮城県鳴子・鬼首地区から山形県最上地方にかけての一帯で，猫を呼び寄せるときの舌打ち音を「言語化」した感動詞チャッチャッから，猫の名称としてのチャコ・チャペ・タコなどが生じた可能性が指摘されている（小林隆(2011)）。この場合は，チャにコが付いた語形が名詞として用いられる。繰り返し語形が短縮され，コを付けた形が名詞として用いられることから，鳴き声のオノマトペ「ベー」に指小辞コの付いた「ベコ」の類例と考えられる。

オノマトペ由来の名詞は，幼児語にとどまる場合もある。喜界町城久（ぐすく）方言では，鶏を呼ぶときに「トゥートゥー，トゥートゥー」と言い，幼児語として「トゥートゥー（鶏）」が用いられている。しかし，大人語は「トゥイ（鶏）」で，オノマトペ由来の名詞「鶏」に相当する語形，たとえばトゥーのようなものは確認できなかった（竹田(2011)）。

ベーとベコ類の場合もこれらと同様に，鳴き声を表す語形は，オノマトペそのものか幼児語の名詞であり，それを一定の規則によって変化させた語形が一般的な名詞として用いられると考えられる。

４．今後の課題

以上，牛・子牛の鳴き声のオノマトペと牛・子牛の名称について，新たに略図を作りながらその関係について考察したが，本稿ではカードデータを参照したが，諸事情でカード画像は確認しなかった。カード画像には，回答語形の新古や共通語・幼児語などの情報があり，次の段階ではこれらを反映させた分析が必要である。

牛・子牛の鳴き声の調査結果を地図上に示すと分布が認められることは事実であるが，それがどのように形成されたかについては不明である。オノマトペや感動詞のような形式が，方言においてどのように存在しているのか，あるいはどのように他の語を作りだすのか，不明のことは多い。今後の課題としたい。

参考文献

小野正弘編(2007)『日本語オノマトペ辞典―擬音語・擬態語 4500』小学館
国立国語研究所編(1972)『日本言語地図』第 5 巻，財務省印刷局（1984 再版）
国立国語研究所編(1972)『日本言語地図　第 5 巻　解説』財務省印刷局（1984 再版）
国立国語研究所編(1982)『日本言語地図作成のための調査票―第 2 調査票―』
小林　隆(2011)「感動詞「猫の呼び声」」『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』pp.162-172．東北大学大学院文学研究科国語学研究室
佐藤亮一編(2002)『方言の地図帳―お国ことばを知る』小学館
澤木幹栄(1979)「物とことば」徳川宗賢『日本の方言地図』中央公論社，93-97.
竹田晃子(2011)「鹿児島県喜界町方言におけるオノマトペの語彙的特徴」木部暢子・窪薗晴夫・下地賀代子・ローレンス　ウエイン・松森晶子・竹田晃子『「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」喜界島方言調査報告書』，139-162．国立国語研究所
中本正智(1981)『図説　琉球語辞典』金鶏社
中本正智(1987)「喜界島方言の言語地理学的研究」『日本語研究』9，54-71．東京都立大学国語学研究室